

ガラスと沖縄と私

AGC(株) 材料融合研究所

赤塚 公章

GLASS, OKINAWA and I

Kosho Akatsuka

Materials Integration Laboratories, AGC Inc.

筆者は機関誌 NEW GLASS の編集委員を始めてから、今号でちょうど2年になる。小林専務理事より、「そろそろコラムにでも執筆はどうだろうか。」とのお話を頂き、自分自身も2年も経過するのだから、何かしらで機関誌に貢献しないといけないとの思いから、快諾してしまった。読者の立場では、コラムは気軽に読めて、書いた方の人柄や趣味など人なりを知ることができたりするため好きなコーナーであったが、いざ、自分自身が筆者の立場となると何を書けば良いか非常に悩んでしまい、快諾したことに大変な後悔をした。（“気軽に”と書くと今まで執筆された方々に失礼にあたるが、好意的な意味で捉えて頂きたい。）題材に悩んだ挙句、原稿の締め切りも大幅に超過してしまい、関係者の方々には大変なご迷惑をかけてしまった。過去の先輩方のコラムを一つずつ見直すと、執筆されている方々は著名な方が多く、そもそも私が執筆して良いかと、また悩んでしまったが、引き受けた以上なんとしてでも書ききらなくてはとの思いで執筆した。

ガラスの機関誌だから、ガラスについて何かしら執筆しようと想い、色々とネタ探しをしたが、筆者自身ガラスの研究開発に携わり始めたのは、30歳になった8年前で、現職に就いてからのことであり、学生時代からガラスを研究していた方が多い業界の中で、ガラスのサイエンスについて語るのは無理だということに気付いた。そもそも、現職に就く時の面接でも、「なぜガラスが研究したいのか。」との問いに、「透明で綺麗だからです。」と自信を持って一言だけ答え、後の上司となる方々を絶句させてしまったくらいガラスを知らずにガラス業界に入ったことを思い出した。入社後、ガラスは透明な物だけでなく、結晶化ガラス、分相ガラス、着色ガラスなど様々な種類が存在することを知り、一般人はガラスのことをほとんど知らずに日常生活で当たり前のように利用していることに気付かされた。

前置きが長くなってしまったが、やはりガラスについて執筆しようと思う。ただし、サイエンスなしのガラスを。筆者の趣味の一つは、沖縄の離島を巡ることで沖縄の有人島を全て訪れたいと思っている。沖縄の有人島は全部で47島¹⁾存在し、初めて沖縄を訪れてから今年でちょうど20年になるが、今までに37島巡った(図1)。沖縄でガラスと言えば、皆さんご存知

〒 211-8755

神奈川県横浜市神奈川区羽沢町 1150 番地

TEL 050-9014-1945

FAX 045-374-8866

E-mail: kosho.akatsuka@agc.com

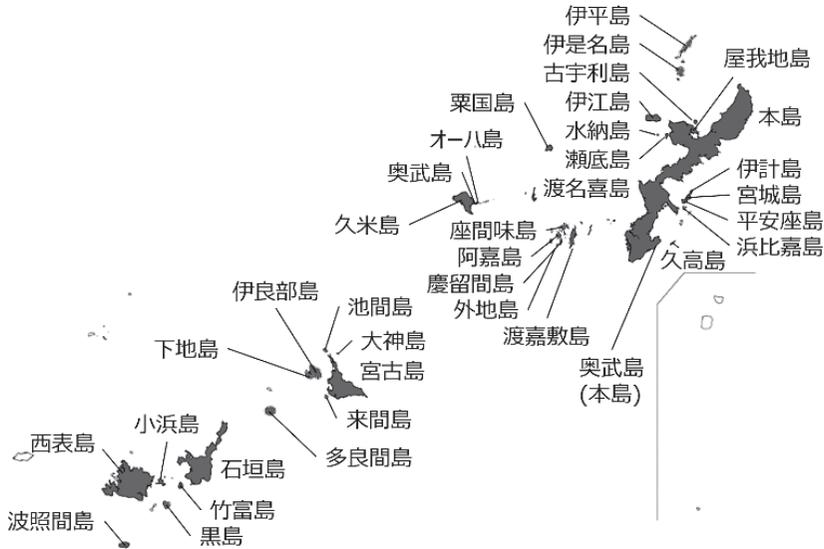


図1 筆者が今までに巡った離島

の通り琉球ガラスであり学生時代は「カラフルで綺麗だな。」とお土産に購入したり、現地の飲食店で飲み物や食べ物が提供されるコップや皿を見て、「沖縄だなあ」と感じていたくらいであった。正直あまりガラスに興味はなく、沖縄のお土産はガラス工芸品が多いな、飛行機で帰る時に割れないように持ち帰らないといけないな、などと思っていたくらいのものである。

ガラス業界に入ってから、琉球ガラスを見る目も変わり、沖縄に行くと必ずガラス工房やガラス店を覗くようになった。琉球ガラス作品を見て、以前は単純にカラフルで綺麗だなと思っていた感覚も、この着色はコバルトだな、クロムだな、金だな、などと科学的エッセンスを入れて見るようになったり、自分でも沖縄のガラス工房で琉球ガラスのコップなど簡単な作品を制作するようになった(図2)。工房でガラス作品を作製する時に、炉内の色で大まかに温度は「1300°Cくらいかな」などと思えるようにもなり、手伝って頂いている職人さんに確認してみると、大体合っているレベルにまでなってきた。このような会話をしていると職人さんに驚かれることも多々あり、時にはガラス作家

と間違われることもあるが、作品を制作し始めると成形や吹く工程の手際の悪さで、すぐに素人だということがバレてしまうのだが。。。

また、趣味である沖縄の離島を巡っていると、地酒という言い方が正しいのか分からないが、島ごとに独自の泡盛を製造していることが多く、その泡盛を詰めているガラス瓶にもそれぞれ特徴があり非常に面白いことにも気付かされる。泡盛を飲まずとも瓶を見ているだけでも楽しい気分になる。もちろん泡盛を飲まないこ



図2 工房で琉球ガラスを用いた作品制作時の様子(筆者:左)



図3 久米島の米島酒造の泡盛

とはなく、試飲して購入するのだが、瓶の着色具合が1本1本微妙に異なるガラス瓶があったりすると、ガラス瓶の綺麗さやデザインで選んでしまうことが多くなった。特に筆者が購入して気に入っている泡盛のガラス瓶は、久米島にある米島酒造²⁾の泡盛の瓶である(図3)。グラデーションが非常に綺麗なため、今では家のインテリアになってしまっており、2014年に購入したにも関わらず未だに開封出来ておらず古酒となりつつある。

このように沖縄のガラスは、工芸品が工業製品のガラスのように生活必需品の一部として利用されていることが多く、ガラスとの関わり方自体が独特の文化のように感じるがあるが、これは琉球ガラスの歴史に由来するものではないかと思う。本誌を読まれている方々は、ご存知の方が多いと思うが、沖縄のガラスの歴史を簡単に書かせて頂く。沖縄のガラス製造の歴史は諸説あるが、明治時代に長崎や大阪からガラス職人を招き、ランプのほや、駄菓子瓶、蠅取り瓶などの生活必需品製造が始まりとされている。そして、戦後、駐留米軍の使用済みのコーラ、ジュース、ビール、ウイスキーの空き瓶を活用し、5色(透明・薄青・茶・緑・黒)の着色ガラス瓶の色をそのまま利用し、“気泡”や“厚みの不均一性”もデザインとして活かした沖

縄独自のガラス、つまり琉球ガラスが誕生したとされている。³⁾このような背景であるため、琉球ガラスは生活必需品として現在も利用されているのは当然のことなのかもしれない。また、上述のように琉球ガラスは着色がある使用済みガラスを利用するが、その色を無理矢理消すのではなく、巧く活かし新たな製品にする。もっとも近年は、再利用ガラスだけでなく、新たな着色成分の添加や原料を追加して色合いや粘度の調整を行うなどしているらしいが、なるべくあるものを利用し、新たな価値ある製品に蘇らせるという観点は、ガラスのリサイクルに通じるなど、工業製品の研究開発を行う上で参考になる考え方ではないかと思う。また、工業ガラスの研究開発を行っている、琉球ガラスのような“ひび”や“泡”というものは、どうしても気になり、所謂工業製品でいうと欠陥と判断し、割れやすいのではないかと不安を感じてしまったりするが、厚みを持たせたり、外側に薄くガラスを融着させて二重構造にしてガラスに強度を付与させたりすることで、デザイン、質感や実用強度をきちんと兼ね備えたガラスになっていることに気付かされる。もちろん工業製品と工芸品のガラスでは、用途や生産量など異なる点は多くあるが、工芸製品から新たな工業製品の研究開発のヒントが得られることがあるのではないかと思い、これからも琉球ガラスだけでなく、様々な工芸品のガラスに触れてみようと思っている。

参考資料

- 1) 沖縄県庁ホームページ 離島関係資料(平成31年1月)
https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kikaku/chiikirito/ritoukankeisiryu_kako.html
- 2) 米島酒造ホームページ
<https://yonesima.jp/>
- 3) 琉球ガラス村ホームページ
<https://www.ryukyu-glass.co.jp/about/glass/history/>